

8-8		主題	ストレングスモデルを活用した利用者と職員の相互関係の変化について	
ケアマネジメント		副題	「私の強さ知っていますか？」～利用者からの発信～	
ストレングスモデル				
研究期間	3ヶ月	事業所	生活相談員スキルアップ研修 Cグループ	
発表者：川村 和佳（かわむら わか）			アドバイザー：林 正（はやし ただし）	
共同研究者：高橋蘭/長田信介/熊沢晃/二村俊行/加藤香予子/小原淳/熊谷和重/陳野美紀/西澤欧介				
電 話	03-3336-6511	メール	nakano-j@nfsj.jp	
FAX	03-3336-5220	URL	http://www.nfsj.jp/sirasagi/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	私たちは東京都社会福祉協議会の高齢者施設部会・生活相談員研修委員会が主催する「生活相談員スキルアップ研修会」に参加し、多岐にわたる生活相談員の中核業務の中で「ケアマネジメント」に焦点をあて、果たすべき役割について研究しているグループです。
------------------	---

《研究前の状況と課題》 ご利用者のケアを行うことが必要と言われていたが、実際は業務に追われ施設や職員主体となってしまうことが多い。私達生活相談員も「利用者の味方」で代弁者となるべきなのだが、業務の多さや忙しさを理由に出来ていないことが多かった。 ご利用者は「在宅での生活」を諦め、我慢した生活を送る覚悟を決めて施設に入所しているのではないだろうか。職員は自分の気持ちを抑えて生活している利用者に甘え、どのような思いで入所して、どんな想いを秘めているのかということに目を向けているだろうか？ 多くの施設では「医学モデル」と言われる「利用者や社会環境のマイナス面を改善することに着目し、補うケア」が行われているが、ご利用者が一度あきらめた想い、生活を取り戻すため、その方の背景や気持ちに目を向けたケアをしたいと考えた。	《研究の目標と期待する成果》 『ご利用者の想いに目を向ける』ことを目標に掲げ、話し合いを進めた結果、「ご利用者の本来持っている長所や希望に着目し、それを引き出し活用していく」ストレングスモデルという手法でアプローチすることが有効なのではないかと考えた。 職員の視点を利用者の抱える課題やできないことを中心としたものから「何を望んでいるのか」「何ができるのか」という視点へ変えることでご利用者との関係性に変化が出てくるのではないだろうか。 仮説① 職員自身のケアに対する視点や利用者との関わり方が変化してくるのではないかと考えた。 仮説② 職員の対応や声かけが変わることで、ご利用者からの発信が多くなるのではないかと考えた。
---	--

《具体的な取り組みの内容》

①まず 10 施設で相談員が利用者のストレングスを見つけることを意識し、1 人のご利用者へ面接を 1 回行った。生活相談員がこの取り組みの効果を実感し、ケアの現場に広める方法を検討。

②伝達する上で生活相談員のグループ間で共通の認識をもって取り組めるようにツール内容を作成した。ストレングスモデルの簡単な説明文と職員が使用する書式には実施前・実施中・実施後の利用者と職員自身の変化、気づいた事を 2 週間記入していただく書式を準備した。

③ツールを基に各施設で生活相談員からストレングスモデルの実践について介護職員 1 名に実施内容について説明を行った。1 名以上で取り組むかは各スタッフ、施設で自由とした。

④6/1～14 までの 2 週間実施。

その間、生活相談員は取り組む中で職員が主体的に実践できるように、また職員がその日の気づきを意識できるように現場ヘフォローを行った。

⑤2 週間の実施後に各職員にアンケート(10 項目)を実施。倫理的配慮から無記名で行った。

⑥10 施設のアンケート結果(回答職員 49 名)
参加職種:介護職 42 名、他 7 名
ストレングスモデルを以前から知っていたのは 40 名。→9 名取り組みの中で情報交換の場が以前より増えた 36 名、変わらない 13 名であった。

⑦各施設での取り組み結果についてまとめ、今後継続していくため、また複数職員へ広めていくための課題について話し合う。

《取り組みの結果と評価》

仮説①についてはアンケートから職員自身が変化を感じたのは全体の約 6 割に上ったことが分かった。また、ご利用者と職員自身の両方の変化があったことが分かった。具体的にはご利用者自身の活動量が増えて活気が増したり、自ら話すようになった、表情や態度に変化が見られたとの回答があった。職員側からは情報交換の場面が増えたかという質問に約 7 割が増えたと回答があった。職員自身が自分たちの対応を振り返り話し合う機会ができた、一人ひとりが以前より話しかけることで情報量が増えたとの回答がみられた。この結果から仮説①の利用者と職員の双方の変化については認められた。仮説②については対照的な事例が挙げられた。一方では実施することでご利用者自身の生活が向上したが、一方では取り組むことで逆にご利用者自身が不穏になった。取り組みを行うことが利用者の状況によっては逆の効果を生じることがわかった。

《まとめ》

今回の実践から職員とご利用者の関係が変化することがわかったが、結果が必ずしも良い変化のみではないことが分かった。原因分析については今後の課題の一つとなる。実践の際にはマイナスに働くリスクがあることを認識し、状況を見極めながら実施を進めていく必要がある。そのような点に十分に配慮することでストレングスモデルはご利用者の自立支援を実現していくためのひとつの有効な手段として捉えることができる。

《提案と発信》

生活相談員の役割として今回の取り組み同様、事前面談で情報を挙げ、職員教育・スーパーバイズを常に行い、他業種・介護職の専門性を踏まえつつ、連携・調整しカンファレンスや記録様式を工夫し情報共有を行うことが必要であることが分かった。そこで新たに生まれる課題に利用者自身と共に向き合い、利用者の自立支援をサポートすることが求められているのである。

【メモ欄】